
ピアノレッスン

kanon

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ピアノレッズン

【Nコード】

N6014X

【作者名】

kanon

【あらすじ】

涼介は大学受験を目指す、予備校生。四月から全寮制の予備校に通っている。門限は夜の九時で、三食の食事付き。そう聞いたときは窮屈で退屈な一年間を想像していた。しかし。初めての一人暮らしは意外に自由で、密かな楽しみも、できた。

毎晩隣のマンションから聞こえてくるピアノは、勉強で疲れた涼介の心を癒してくれる。『どんな人が弾いているんだろう』『一度でいいから、その姿を見たい』。どんどん、姿の見えない人物に惹かれていく涼介。気になるあまり、その人物を突き止めようとす

るが……。

寮生活の始まり

隣のマンションから、ピアノの音が聞こえてくる。聞いたことのない曲ばかりだったが、あまりにも情熱的な演奏に、思わず心を奪われてしまう。演奏している本人の姿を見たことはない。音大を受験する女子高生か、それともピアニストを目指す女子大生か。十八歳男子の乏しい想像力では、その程度の人物像しか浮かばなかったが、たとえ深夜に聞こえてきても全く苦にならないほどの技術を持っていることだけは、間違いない。

今年の四月、正確には三月の中旬、大学受験に失敗したことが確定した涼介は、父親の勧めで全寮制の予備校に入った。というのも、実家は中途半端な田舎で近所にまともな予備校がなく、通うとなると朝五時起き。両親への負担も自分への負担も大きいと判断した涼介は、相当気がすすまなかったが、父の言葉に従った。

「涼介、解つてると思うけど、受験のためにここに入るんだから面接兼、寮の下見に訪れた際、父親はそう釘を刺した。都会は何かと誘惑が多い。大学時代を都会で過ごした父の口癖だ。本人も相応な誘惑に翻弄されたのだろう。父が選んだこの予備校は、門限など生活面でも厳しいことで有名で、規則を守れそうな生徒かどうかを、まず面接で確認するということである。母親譲りの柔らかい顔立ちのおかげか、それはすんなりと突破できた。

「寮母さんが三食作ってくれるし、夜中に出歩くのも禁止。これなら無駄遣いのしようがないな」

仕送りも少なくてすみそうだと父親が笑う。恐らく、そんな自由のない生活に嫌気がさして、さっさとここを出て行くために、皆勉強に励むようになるのだろう。その時の涼介は、勝手な想像をして溜め息をつき、絶対に一年で終わらせてやる、と心に誓った。

ところが、寮に入って一ヶ月が過ぎた頃。既に親しくなった戦友

たちと食堂で夕飯を共にしながら、意外にも心地良さを感じている自分に戸惑っていた。まず、親の小言がない。これは皆が共通して感じる開放感だった。そして、食事が文句なしに美味しい。割増料金もとられず、おかわり自由。寮母の西川秀子は五十代半ばの典型的なオバさんタイプで、小柄で小太り、いつも元気で感じがいい。皆、秀子さん、と名前で呼んでいた。

そして、……ここからは自分だけだろうが、夜、机に向かっていると、何処からかピアノの音色が聞こえてくるのだ。涼介自身はピアノを弾いたこともないし、家族の誰もそんな高貴な趣味などなかったが、聴いていると不思議と心を癒される。はじめのうちは、近くにピアノ教室でもあるのかと思っていた。しかし、その音は深夜になっても聞こえてくることがある。そして、弾き手は、一人。

『どんな人が弾いてるんだろう』

繊細で、かつ情熱的なピアノに、涼介の想像は止まらない。日を追うごとに、あやふやだったそのシルエットは、年上の髪の長い女性の姿になった。鍵盤の上を滑る、細い指が思い浮かんだ。一度でいいから、その姿を見たい。涼介は魔法にかかったように、彼女のことばかりを考えるようになっていた。

食事を終え、真っ直ぐ部屋に帰りなさいね、という秀子の声にだらけた返事をした涼介は、携帯の時計を確認した。まだ門限の九時まで一時間以上ある。

「俺、ちよつと外歩いてくる」

いつものように友人たちにそう声をかけ、涼介はいそいそと寮を出た。

会社帰りのサラリーマンが、駅へと急ぐ姿。予備校帰りの生徒が、携帯の画面を眺めながら歩いている姿。涼介が生活する寮は、駅裏の比較的大きな通り沿いにある。予備校はその隣の建物だ。

涼介は、寮の西を流れる川を挟んだ、八階建てのマンションの前に来ていた。ピアノの音が聞こえるのは、この方角に違いない。そ

う思っていたから。涼介にとって、ピアノの弾き手を突き止めることは、既に楽しみみの域に達している。日課といってもいい。男ばかりの寮生活で、クラスも理系。数少ない女子と触れ合うことなど皆無に近いため、余計に執着してしまうのかも知れない。……今日こそは、その姿を確かめたい。

ピアノの音が聞こえる時間帯を研究した結果、平日の、門限の九時を過ぎた頃から。ということは、何らかの定職についているか、学校へ通っているかのどちらかだと推測できる。

涼介はいつものように、橋の上に移動して欄干に凭れ、携帯の画面を見ているフリをしながら、通り過ぎる人影を観察した。帰宅ラッシュの時間帯で人通りが多かったが、立ち止まっている人の姿はなく、誰もが急ぐように足を動かしている。皆、目的地があるのだろう。自分には、こんなに急いで向かう場所なんてないな。そんなことを考えながら、マンションに入っていく人影を探す。しかし、明らかにスーツ姿の男性ばかりで、若い女性は皆、駅のある方角へと消えていった。

五月に入って気候も良く、夜風も心地良かったが、門限が近づくとつれ、何だか寂しいような感傷的な気分になってくる。あと十分あと五分。涼介はそこであきらめて、マンションに背を向けた。その時。

コツ、コツ、コツ、コツ、と、ヒールの音が横を通り過ぎる。フワツと届く薔薇の香り。反射的に振り返ると、ブランドもののトートバッグを肩にかけたOL風の女性が、マンションの入り口に消えるところだった。後ろでまとめた髪と、スラリとしたパンツスーツ姿がよく合っている。

「……………」
胸が、破裂しそうにドキドキ音を立てた。

彼女に会うために

寮の食堂は、講師たちも利用する。予備校の講師は人気商売とあって、授業以外の時間も気さくに寮生と話をした。特に物理講師の村上は、まだ二十代と若く話題も豊富で、男女問わず予備校生に人気だった。

「先生、隣のマンションに引っ越したんだって？」

秀子が厨房から声をかける。情報が早いな、と村上は驚いたように笑った。

「実家から通えなくもないんだけど、渋滞が酷くてさ。毎日ハラハラするくらいなら、思い切って引っ越そうと思ったんだ」

隣のマンション、と聞いて、涼介の耳はその会話に釘付けになる。家族向けの分譲から、一人暮らし用の賃貸まで、部屋も家賃も様々だそう。東の角部屋は高くせに空きがない、と、空いていたら借りるつもりだったような口振りに、

「予備校の講師って、そんなに儲かるの？」

誰かに尋ねられ、冗談だよ、言ってみたかっただけだよ、と怒ったように返すのも面白い。涼介はその会話に便乗して、

「女の人の一人暮らしも多いの？」

そう尋ねてみた。

「ああ、多いと思うよ。デザイナーズマンションっていう売りだから。俺としては、そんなお洒落じゃなくてもいいから、家賃を安くして欲しいけどね」

それでも近さに負けて、契約してしまったらしい。確かに、これ以上近いマンションはなさそう。おまけに寮の食事付き。

一人暮らしのOLか……。その魅力的な響きに、しばらく食事をする手が止まっていた。それを、すかさず見つけて友人の敦司あつしが指摘する。彼は部屋が隣で、隠れて一緒に酒を飲んだりゲームをしたりする仲だ。

「クラスに女子が少ないからって、手当たり次第は良くないと思うぜ？」

その言葉に、涼介は敦司を睨んだ。

「手当たり次第って何だよ？ 俺だって、誰でもいいわけじゃないんだよ」

すると、敦司はにやり、と笑う。

「じゃあ、ピアノを弾いてる誰かさんだろ」

完全に凶星だったが、再び敦司を睨むと、今度はそれを聞いていた村上が口を挟む。

「ああ、ピアノ弾いてる人、いるよな。ここまで聞こえてくるってことは、こっち寄りの部屋なんだな」

敦司のせいで、詳しくは尋ねられなかったのは残念だったが、あのマンシヨンにピアノを弾く人物が住んでいることは確認できた。涼介はそれだけでも満足して、憎らしい友人と共に部屋に戻った。

今日も、ピアノの音が聞こえている。曲は、穏やかな和音に始まり、徐々に独立して流れ出した。それはまるで隣を流れる、夜の川のように感じられ、しばし、窓から見える景色を眺める。月が明るい夜だ。静かでゆったりとした流れはその光を映し、揺らぎながら河口へと運んで行く。

涼介は物理の参考書を開いていたが、もう一時間ほど同じページのまま、その内容を見るでもなく、過ごしていた。どうしてこんなにも、惹き付けられるのだろう。ただの音なのに。涼介は懸命に、その誘惑から逃れようとしてみた。しかし、勝手に、体の中に流れ込んでくる。もっとも、窓を閉めようとしないうちに、完全に逃れる気はないのだったが。

「俺、このままだと確実に二浪だよ」

勉強の息抜きなのか、暇を持て余したのか、部屋を尋ねて来た敦司に、そう打ち明けた。姿の见えない相手に恋をしまっている現実。後ろ姿だけは確認したけれど、その中途半端さがかえって涼

介を惹き付ける。

「気になって、何も手につかない。何かいい方法、ないかな」

「……ないこともないけど」

敦司はそう言いながら、窓際に寄り、腕組みをする。さっきの穏やかな曲は終わり、今度は甘いメロディが流れ始めた。

「確かに、プロ並みの腕だな。きっと楽譜見ないで弾いてるぜ」

この曲、難しいのに、と呟く。どうしてそんなことが解るのか、不思議に思っていると、

「俺も、中学まで習ってたから」

そんな意外なことを言つて涼介を驚かせた。敦司は引出しの数が他の友人たちに比べて格段に多い。まだまだ涼介の知らない面を持つていそうで、底知れないとも思う。精神年齢が相当高いのかも知れない。時々、本当に同じ年かと疑うような発言をした。

「……で？ いい方法って？」

急かすと、敦司はニヤニヤしながら、まあ、焦るな、と涼介をなだめる。完全に上に立たれて腹立たしいが、何も思い付かない自分が悪いのだ。そこは、ぐつと堪えた。

「休みの日に、村上の部屋に遊びに行く。そして、ピアノが始まったら、その音のする部屋を探すんだ」

しかし、そうするにはまず、村上に事情を打ち明けなければならぬ。第三者というか、予備校関係者に知られることだけは避けたいと思った。不真面目な行為と受け取られかねない。首を縦に振らない涼介に、敦司は仕方ないな、というように軽く息を吐き、

「それが、あのマンションの入り口にさ、張り紙するんだよ。ピアノを教えてください、って」

ピアノを本気で習う覚悟があるんだったらね、と付け加える。その奇抜なアイデアに驚いた涼介は、マジマジと敦司の顔を見つめた。それ以上に良い方法はないように思える。

「おまえ、すごいな」

「まあね」

そう言いながら、涼介の机の一番下の引出しを指差す。ここにビールを隠しているのを知っているのだ。敦司は見た目も随分大人びていて、コンビニで堂々と酒を買う。涼介の引出しの中身も、敦司が買ってきてくれたものだった。

「二本で勘弁しといてやるよ」

勝手に開けて、缶ビールを二本取り出した敦司は、頑張れよ、と涼介の肩を叩いて部屋を出て行った。最初からビールが目的だったのだ。彼の部屋には小型の冷蔵庫が持ち込んであり、涼介もそれを使わせてもらっている。今からさっそく冷やすつもりなのだろう。その背中を見送ったあと、涼介はおもむろにルーズリーフを一枚取り出し、

『ピアノを教えてください先生をさがしています。全くの初心者です』
できるだけ丁寧な文字で書き、その裏に携帯のアドレスだけを記入した。名前や番号を入れて、悪戯があっても困る。

ピアノを習いたいわけでもないのにこんな張り紙をすることに、若干の抵抗はあった。しかし、どうしてもピアノを弾いている人物を確かめたい。涼介の気持ちはもう完全に、彼女への恋心だったが、弾き手が気になって勉強が手につかないのも事実。これは、受験に失敗しないためにも、必要なこと。涼介はそう自分に言い聞かせて、もう一度その紙を眺めた。

ドキドキの時間

翌日の昼休み、涼介は、女子から借りた可愛らしい水玉模様のマスキングテープで、マンションの硝子戸にルーズリーフを貼付けた。これも敦司の入れ知恵で、女子と思わせれば警戒されることもないから。騙すようで気が引けたが、それよりも一度会ってみたいと思う気持ちが勝った。

「でもさ、涼介が見たOL風の女だとは、限らないじゃん」

期待に胸を膨らませている涼介に、敦司が水を差す。

「いや、間違いないよ。あのあと部屋に戻ったら、ピアノの音が聞こえてきたし」

そうでないかと、困る。涼介が会いたいののは、あの子の彼女なのだから。今までは理想の女性像など描いたこともなかったが、彼女の姿を見てから、それが理想になってしまった。自分を飾りすぎず、加えて上品な女性らしい香り。

「デキる女、って感じだったな。やたらと髪を巻いてないところがいいよ」

今どきの女子は、それが決まりであるかのように、どこかしら髪をカールさせている。別にそれが嫌いなわけではなかったが、自然な曲線を描く髪を無造作にしばった髪型に、好感を持ったのだ。

「賭けようぜ。もし、涼介が見たっていう女だったら、こないだのコーラを倍にして返してやるよ。でも違ったら、引出しの中身は全部俺のもの」

休憩を終えた講師が教室に入ってきたのを見て、ビールをコーラと言い換えたのだろう。敦司は抜け目がない。妙に自信のあった涼介は、了解、と返事をした。

ところが今度は、落ち着かない。相手は社会人なのだから、こんな時間に連絡が入ることはないと解っていても、携帯から目が離せなくなってしまう。小学校のときに担任の先生を好きになった時

以来の気持ちだ。同級生を好きになるのとは全然違う、緊張感が苦しい。思えば、今まで本気で好きになったのは、自分より年上の女性ばかり。手が届きそうで、届かない。届かないようで、届きそう。その距離感が、涼介の心を惹き付けるのかも知れない。何度も溜め息をつく涼介に、隣の席の友人が、気分でも悪いのかと声をかけてきた。似たようなものだと思った涼介は、頷いて、そのまま机に伏せた。

「ダメだ。全然食欲がないよ」

夕飯も、ろくに喉を通らない。事情を知っている敦司だけが薄笑っているが、他の友人たちは心配そうに見ている。

「俺、先に戻るわ」

食えることをあきらめて、涼介は自分の部屋に戻った。備え付けのベッドに身を投げ、頭を抱える。……本当に、連絡が来るのだろうか。もし、万が一連絡が取れたとして、一人暮らしの女性の部屋に上がり込むことなど、できるのだろうか。もし、入れてもらえたとして、二人きりで、ピアノの前で……。

想像し出すと止まらなくて、涼介はそのいかがわしい妄想を掻き捨てるように、勢い良く起き上がった。すると、部屋のドアをノックする音。ということは、敦司ではない。彼はいつも、勝手に入ってくるから。涼介はドアを開けた。

「あ、……宮間くん、大丈夫？　なんか、具合が悪いつて聞いて」
同じコースの北川 真子まこだった。数少ない理系女子の一人。成績優秀で、一つ上のクラスに移るとい話が出ている。

「これ、良かったら、食べて。こういうのだったら、食欲なくても食べれるでしょ」

差し出されたのは、コンビニの袋に入った、ヨーグルトだった。飲み物も入っている。

「……ありがと。でも、いいの？」

「うん。自分のは別に買ってあるの。じゃあ、お大事にね」

真子はそう言って、走って帰って行った。女子寮は別棟で、同じように門限があるからだ。涼介はしばらく立ち尽くしていたが、思い立って、隣の敦司の部屋をノックした。

「ちょっと、冷蔵庫貸して」

「真子ちゃんからの差し入れ？」

「……何で知ってんだよ？」

全く、敦司に知らないことはないのではないかと思えてくる。

「たった今、廊下で会って部屋を聞かれたから」

涼介は納得して、小さな冷蔵庫にもらった袋ごと入れる。先日奪われたビールはもう跡形もなかった。

「で、連絡あった？」

「ないよ、まだ」

「まあ、今日は金曜だからな。OLは合コンか女子会ってところだろ」
「……」

やはり、つい最近まで高校生だったとは思えない。半ば呆れていると、彼はようやくそのわけを説明してくれた。

「歳の離れた姉貴がいるんだよ。ごく普通の企業のOLで、容姿も並だけど、週末はいつも終電まで帰ってこない」

敦司の並外れた知識量は、家族構成にあるらしい。知識と言っても、余分な、とつく種類のものだったが。

何処にいても落ち着かず、部屋に戻って時計を見ると、午後九時過ぎ。ピアノの音は、まだ聞こえてこない。涼介は再び息苦しくなってきた。ベッドの上で膝を抱えた。……どんな人だろう。優しい人だろうか。男性並みに仕事をこなすキャリアウーマンだったとしたら、レッスンも厳しいかも知れない。綺麗な女性にきついことを言われるのは、どんな気分なんだろうか。意外に、快感だったりして。そんなことを考えてしまう自分に呆れては、時計を見る。期待と不安に翻弄されながら、涼介は時間が過ぎるのを待った。

年上のOL？

何か音が聞こえた気がして、目を開けた。蛍光灯の光が眩しくて、何度も瞬きをする。明かりをつけたまま眠ってしまったようだ。時計を見ると、深夜二時を回っている。今から風呂に入るか、明日の朝にするかを悩んでいた涼介は、ふと、携帯に目をやった。ランプが、点滅している。一気に目が覚め、心臓が倍速で打ち始めた。

『ピアノ講師の件ですが、私で良ければお任せください。ご都合をお覗いたいので、後日改めてご連絡さし上げます』

その丁寧な文章の下に、電話番号と、フルネームが書いてあった。奥村葉月。はづき、と読むのだろうか。あのキリッとしたスーツ姿にピツタリで、ますます惹き付けられる。嬉しさと怖さが同時に浮かんで、携帯を手に、ベッドの上で足をバタバタさせた。

しかし。こんな時間まで出歩いていたのだ。敦司が言っていたように、合コンか、それとも既に恋人がいて、デートだったのかも知れない。まだ会ったこともないのに、急に嫉妬心が沸いてくる。

『会ったら、一目惚れですって言おう』

相手がいたって、構うもんか。涼介は自分でも驚くほど強気になって、布団を頭からかぶった。

土曜日の授業は、午前中だけ。午後は全国的に人気のある有名講師を招いて、有料の講習会などが行われるが、参加は自由。主に、現役の高校生で席が埋まっていると聞いた。勿論、今日の涼介は、そんなものに出ている暇も余裕もない。

「いいなあ。なんか、羨ましくなってきた」

涼介の緊張した様子を見て、敦司が言う。

「俺もそうなの、味わってみたよ」

「……おまえ、彼女いるからいいじゃん」

「年上ってというのが、羨ましい」

年上、と言われて、ますます緊張が高まってきた。よく考えてみれば、相当、上かも知れないから。大卒で社会人一年目だったとしても、二十二歳。自分より、四つも上だ。

「俺はもつと上だと思ふな。だって、隣のマンション、家賃高いって言つてたる？ 二十万そこそこの給料じゃ、住めないって」

あのととき村上は謙遜してたけど、と付け加える。一般的な会社員の給料がどれくらいなのか、涼介には見当もつかなかったが、敦司が言うのなら間違いのない気がする。そんなに歳の離れた女性と話したことは、ここ最近一度もないのに。

「やめてくれよ、これ以上緊張したら、吐いちゃうよ」

昨日に引き続いて食欲のなかった涼介は、朝食に真子からもらったヨーグルトを食べただけで、胸が一杯になってしまった。当然昼になつてもそれは続いていて、今は美味しそうにトンカツ定食を食べる友人たちを眺めている。

「涼ちゃん、まだ具合悪いの？ お粥でも作つてあげようか？」

厨房から秀子が声をかけた。

「だから、その呼び方やめてよ。息子じゃないんだから」

涼介が咎めると、だって可愛いんだもん、とやめる気配がない。母親にも未だに涼ちゃん、と呼ばれていたが、それを知られているような気がして、何だか恥ずかしい。

「お粥も食べれないよ、きつと。こいつのは、恋の病だから」

信じられないセリフを大声で言つて、敦司が笑う。

「なんだ、それなら仕方ないね。年頃だもんね」

可愛いんだから、とニヤニヤしている。穴があつたら入りたい、とは正しくこの状況のことだ。誰が好きなんだ、という友人たちの声に聞こえないフリをして、涼介は自分の部屋へ逃げ込んだ。

『連絡ありがとうございました。土曜日か日曜日の午後が都合がいいです。よろしく願います』

午後三時を回っても連絡がないことに焦れた涼介は、奥村に返信

してみた。何より、このままでは本当に具合が悪くなってしまう。こんなにも長い間心臓がドキドキしていたら、体に悪い。すると、今度は驚くほど速く、返信があった。

『差し支えなければ、教材などの打ち合わせも兼ねてどこかでお会いしたいのですが、お住まいはどちらですか？』

『すぐ、そばです。窓からマンションが見えます』

『では、橋のところまで今日の十六時に、お待ちしています。奥村』

今から？ 心の準備がなくて、ますます心臓が大きな音を立てた。いても立つてもいられなくなり、取りあえず、隣の部屋に飛び込む。「何だよ？ そんなに慌てて」

「今から、会うことになったんだ。どうしよう、」

「良かったじゃん。頑張れよ」

「頑張るけどさ、……」

涼介はチラッと壁の時計に目をやった。あと、三十分。あと三十分で……。

「大丈夫だよ。おまえ可愛いから、きつとOKしてくれるよ」

そんなセリフに腹を立てる余裕もない。この顔のおかげでうまくいくなら、両親に感謝したいくらいだ。

「それに今どきのOLは、肉食系に飢えてるから。押しに弱いと思うぜ」

こうなってくると、社会人の姉がいる敦司の言葉が、神の言葉に聞こえる。絶対うまくいくから、自信持って行けよ、と散々励まされて、涼介は少し早いが、寮を出た。

休日の駅裏は、のどかなものだ。涼介は自分を落ち着けようと、辺りの景色を眺めてみた。川の遊歩道では、マンションの住人が子供を遊ばせたり、犬を連れて散歩をしていたりする。普段はスーツ姿で通勤するおじさん連中も、ジャージでウォーキングを楽しんでいた。すっかり青葉に覆われた桜の木が、涼し気な木陰を作り出し、その下のベンチで読書をする女性の姿……。

あの時の女性に、似ている。そう思って橋の上から凝視している

と、彼女も顔を上げた。この距離で気付かれることはあり得ないと思っただが、彼女は腕時計を確認するような仕草をして立ち上がり、脇に置いたトートバッグに本を入れて、堤防の階段を上がってきた。どうやら涼介に気付いたわけではなかったようで、彼女はマンション側の橋のたもとで立ち止まり、欄干を背にした。間違いなく、あの時の女性だ。休日なのに、きちんとスーツに身を包んでいる。涼介は、どう声をかけるべきか迷って、考えを巡らせた。奥村さんと呼ばれば良いのか、それとも……。

迷っていても仕方ない。時計の針は、まもなく十六時を指そうとしている。涼介は思い切って彼女のほうへ、近づいて行った。

「あの、」

声をかけると、往來を眺めていた彼女が、涼介のほうを向いた。思ったより長身で、想像を遙かに上回る美貌に驚いてしまう。風に乗って、あのとときの香水が香った。もう、心臓が口から出そうなほどドキドキして、言葉が出てこない。そんな涼介の前で、彼女は目をパチパチさせていたが、やがて、

「……男？」

そうか、それで驚いたのか。すっかり忘れていたが、女と思わせるために姑息な手段を使ったことを思い出す。謝るべきか考えていると、彼女は意外にも、可笑しそうに笑った。笑顔がまた、可愛い。「なーんだ、可愛い女子高生にピアノを教えれると思って、楽しみにしてたのに」

え？ 涼介は自分の耳を疑った。こんなにも美しい女性の口から聞こえる言葉ではないと信じたい。

「まあ、いいや。ちょっと行ったところに珈琲ショップがあるから、そこで話そう」

疑問は解消されないまま、涼介は謎の人物のあとをついて行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6014x/>

ピアノレッスン

2011年10月19日08時17分発行